

「巻き込まれ親父の番外編 「白山亭恋物語」」

作 藤次郎政秀

●プロローグ

H Gが祖父H Hと祖母H Mのなれそめを聞いたのは、祖父H Hの通夜の晩…それも祖父のすぐ下の弟H Jの口からであった。

H Gの父親の話では、H Hは祖母の実家であるミルクホール白山亭に婿入り同然で当時女子高卒業したての祖母と結婚したと言う事を言っていた。

この当時の人達の性分なのか、祖父も祖母もまた父もあまり自分の過去の事は語りたがらない…それは、多分先の大戦という長い戦時下で辛い日々を送って来たからだとH Gは勝手に解釈していたが、大叔父の話では祖父はかなり祖母に入れこまれたらしい…祖母が大胆過ぎて本人達が語るのが恥ずかしがった様だ。

大叔父H Jの家は、今H Gが済んでいる白山亭のあるY国際港駅の線路の向こう側。今でもH Jの孫一家が住んでいて、港町消防署の署員とか、姪のH Mの同僚等がいて、H Gと何らかの結びつきが今でもある。

この大叔父も、H Gの祖父H Hに負けず劣らず、祖父の故郷である山国のG県から親の勧めた結婚話を蹴って幼馴染の女性と駆け落ちの末、頼るところが無いと言う事から祖父H Hの居る白山亭に逃げてきた挙句、当時の父親（H Gの祖父方の曾祖父）から勘当を言い渡され、曾祖父の葬儀に参列できないと言う目に遭わされたが、その裏では曾祖母から何らかの援助を受けていたらしい…と言う事を、後にH J本人から聞いて驚いた。

H Gの祖父H Hは山奥の村で生まれ育ち、徴兵されて海軍に入るまで海を見たことがない人だったそうだ。海軍では駆逐艦の機関士をしていたと父親から聞いていたが、何と言う

艦だかは教えてもらえなかった。祖父は除隊後、故郷に帰っても子沢山の農家の三男なので親の田畑が貰えないので、独りC国に渡る事を考え、兵役任期が開け一旦故郷に戻るべく、汽車に乗ったのは良かったが、基地の隣のY国際港の駅で汽車が大雪で立ち往生して、困っていたところ、当時ミルクホールを経営していた曾祖母の末娘…後の祖母に拾われたのを幸いに、この地に住むことにして、その後結婚できたそうだ。

この曾祖母と言う人もかなり稀有な人生を送った人であつたそう…曾祖母Nの結婚は3度に渡る。その美貌は、この街界限でかなり知られた存在であつたそうだ。曾祖母の結婚歴とY国際港駅の土地開発と深く関係している。

1 度目…D姓（葛葉組4代目）Y国際港の海側の土地はD家の土地であり、Y国際港を誘致した時に港の開発事業で莫大な富を得た。曾祖母のAN（当時）は、運河の向こう側のA味噌醤油店からその美貌を見染められ結婚。5男3女をもうけるが、夫はY国際港の鉄道誘致を巡り近隣の任侠集団との出入りにより死亡。

2 度目…J姓（Y市代議士）死亡した前夫の土地がらみで、Jと知り合い再婚。3男2女をもうけるが、Y国際港駅の土地が絡む汚職（D家ではなく、帝都のゼネコンを入れようとした）で逮捕され、離縁。

3 度目…I姓（工務店）1度目、2度目の結婚で酷い目に遭ったので、実家の傍で暮らしていた幼馴染と再々婚。3男1女をもうけ、つましく暮らしていたが、流行り病で夫に先立たれた。

長男の葛葉組5代目の勧めにより、Y国際港駅前の一等地にミルクホール白山亭を開業する。

屋号の意味は曾祖母の実家のA味噌醤油店の土地の神様から取ったそうだ。

H Gが以前R Rと一緒にD Aの案内で商店街に居る親戚（曾祖母が同じ）の家々に挨拶回りをした時気づいたことがある。H Gの曾祖母が3度結婚した相手の子孫達は、

D 姓…葛葉組は例外として、不動産業、飲食店、食料品店、医薬品店、衣料品店等の商人関係が多い。

J 姓…県領地議会議員を始め、医療関係（姪のH Mが勤務している港町総合病院の経営者もその一人）、警察（港町警察署の署長もその一人）、消防、鉄道関係（この世界では、鉄道員も公務員です。作者注）、港湾局、市役所等の役人関係が多い。

I 姓…工務店、町工場、散髪、電気店、被服・履物等の職人関係が多い。

I 姓の末娘の孫であるH Gは「俺の手先が器用なのは、祖父の血と祖母の血からなんだろうなあ…」と思った。

また、それぞれの居場所がY 国際港駅を境に

海側…葛葉組を筆頭に、D 家が多い。

山側…姪H Mの勤務する港町総合病院や、港町警察署等があり、J 家が多い、

運河の向こう…A 家とI 家…ただI 家の商売（例…散髪、電気店等）によっては、Y 国際港商店街に店を構える。工務店は運河の向こう側。

● I MとH Hの出会い。

「この列車は、大雪のためこの駅で臨時停車します」

Y 国際港駅のホームで駅員の声が響く。

徴兵任期を終え、G 県領地の家に帰宅すべくY 市の海軍基地を出たH Hは降りしきる雪を恨めしく見ていた。

「…たった、一駅で立ち往生かよ！」

と空に突っ込んでも、どうしようもなかった。

HHは皇国の徴兵制でG県の山奥からB県領地Y市の海軍基地に所属する海軍基地に配属された。持ち前の冒険心と好奇心で、海軍基地で船舶ボイラーの操作を学び、駆逐艦の機関士として艦隊任務にまで就いたが、兵役を満了し、周囲の兵役延長の声を振り切って除隊した。

列車から降ろされ、駅舎内でストーブにあたって列車の運行を待っていたが、

「この列車は、本日はこの先には運行しません。次の出発は未定です」

との駅員からの声掛けがあり、駅舎で列車の運行再開を待っていた人達は、その日の宿を求めて次々と駅舎から出て行った。

HHは海軍基地から除隊給金を貰っていたが、このお金は実家に居る親兄弟達への土産と、この後C国に渡るために使うつもりであったので、ギリギリまで駅舎で粘って宿に泊まらないようにしていた。

その望みもむなしく、とうとう駅舎から追い出されてしまった。

駅前のロータリーを脛まで積もった雪を踏みしめながらトボトボと歩く。その内、足の指の感覚がなくなり、おまけに靴紐が切れてしまった。

「…こんな所で…運が無い」

と独り言を言って、冷えて感覚がなくなった足が履いている靴の様子を見ようと屈んだ。足を覆っている雪を描き分けていたら、ふと頭と背中に積もって行く雪の感覚が無くなった。そして、

「こんな所で、座り込んでいたら風邪をひきますよ」

HHが驚いて声の主を見上げると、一人の少女がHHに傘をさしかけていた。

「…ありがとう。お嬢さん、靴の紐が切れてしまいましたので…」

「あら…大変！私の家は目の前だから入りなさいな」

HHが少女の傘の隙間から少女の後ろを見ると、雪化粧した建物が煌々明かりを灯して建っていた。HHはその建物に掛かっている“ミルクホール白山亭”と書かれている看板を見て、

「いや…結構です」

と言った。HH達の時代のミルクホールと言うのは、昼間から宵の口までは軽食と喫茶、夜は酒場と娼館というのが常識であり、HHは少女をミルクホールの客引きと間違えたのは当然の事である。

少女もHHの反応は当然だと分かっているので、

「このままでは、足が凍傷になってしまいますよ、お代は要りませんから取り敢えず入ってください」

と言って、HHの腕を引っ張った。HHは少女に引っ張られるまま白山亭の店内に転がり込んだ。

店内に入ると、着物に割烹着姿の女性が、少女を見て声をかけた。

「M、珍しい事もあるもんだねえ…お前が客引きなんて…だから大雪が降るんだよ」

「かあさん、この人足が凍傷になっちゃうから…」

足先の感覚が無くなり、膝で歩いているHHの腕を抱えてMと言う名の少女は母親であろう綺麗な女性に向かって話していた。

「あら、そうなの？…お湯を…」

と言いかけたが

「…そうだった…ボイラーが壊れたので、お湯は貴重だったわね…」
と女性は困り顔で言った。

「何か温まる物を…」

と言って、少女は慌てて辺りを見回すが、何もない事がわかると、いきなりHHの靴を脱がせて、自分の腹に当てて温めだした。それを見た母親は呆れて

「そんな事、奥でやってくれ：ここじゃ他のお客様が入ってこれないよ」

と言ったので、

「はい」

Mは裸足のHHを店の奥に引っ張って行った。

MがHHの足を温めているのを女給達が代わる代わる覗きに來た。

「あらー、M嬢ちゃん。何してるのー」

「お嬢：男の足を温めるなんて、隅に置けませんわねー」

「あら：いい男じゃない：あたしが変わろうか？」

と冷やかされても、Mは無言で真剣にHHの足を温めていた。

●男屋とボーラー

I Mは無口な少女だった。表情もあまり変えず、喜怒哀楽が少ない。店の主INの末娘と言う事であるが、母親のINもこの末娘が何を考えているか分からなくなる時があった。

「お嬢さんのお陰で凍え死にしないで済んだよ：ありがとう」

店の片隅でI Mが一晩中献身的にHHの足を温めてくれたので、足の指の感覚が戻ってきたHHは礼を言うと、

「…」

I MはHHを黙って見つめていた。

「何かお礼をしなくちゃね：」

とHHは言つてハタと昨晚のI Mと母親らしき人物の会話を思い出し、

「…そういえば、ボイラーが壊れたとか…おいらで良ければ見せてもらえないかな？おいら、昨日まで海軍の駆逐艦で釜焚き（機関士の事です）してたんだけど」

とHHが言うや否や、IMはHHの腕を取り、引っ張った。

「イテテ…何処に連れて行く気だい！」

IMはHHの腕を掴んだままバーカウンター横の従業員出入り口から外に出て、まだ膝下まで積もっている雪の中を店の裏にある一軒の建物に引っ張っていった。

建物の中には、数人の男たちが居て、火鉢で暖を取りながら餅や干物を焼いていた。

「お嬢様…なに用ですか？」

中の一人が声をかける。IMはそれに構わずにHHを引っ張って建物の奥の部屋に入った。

部屋の奥には、大きなボイラーが主の様に鎮座していた。

IMはHHの腕を掴んだまま、ボイラーを見つめ

「先日、今までボイラーを操作していたボイラーマンのFKさんが、ボイラーが故障して噴出した熱湯を浴び、全身火傷で死んでしまったの…それで家中でお湯が使えなくなって…見て貰える？」

と言った。HHが見たところ、ボイラーはHHが乗っていた駆逐艦のボイラーと同型であった。

「…多分、このボイラーなら軍で扱っていたのと同型だから、何とかなりそうだが…配管と分からないと…図面とかないの？」

HHが頭を掻きながら言うのと、IMは急に興奮して

「ホントなの？配管なら、あのパイプに括り付けてある木の札に書いてある」
と言って、配管を指さす。

「…なんで、こんな所に駆逐艦のボイラーがあるんだ？これって軍用だぜ」

とボイラーを見上げて呟くHHに、IMは

「それは、かあさんに聞かないと分かんない」

と暗い表情をして言った。それを見たHHはIMが可哀想になり、

「そう…、見てみるが、その前に腕を離して貰えない？いろいろ当たってるんだけど…」

「アッ！」

と言って、MはHHの腕を掴んだままなのに気づき、パッと話すと、胸を庇う仕草をして顔を赤らめた。

「(大胆な娘だと思ったが、意外とシャイな所があるな…)」

HHは目を細めてニコリとすると、ボイラーの側に行き、「安心しな、おいらに扱えるよ」と行って、親指を立てた。それを見たIMはHHに笑顔で頷く。

HHはボイラーを点検する前に、ボイラーから出ているパイプの様子を見た。IMからの話では、ボイラーに一番近い箇所のパイプから熱湯が吹き出していたらしい。

HHは脚立でその付近を注意深く見た。そして、Mの言った場所の側で外れているパイプを見つけた「…これか」

その時、ボイラーがある部屋の入り口で

「M、早く支度しないと学校に遅れるよ」

とIMの母親のINの声が聞こえた。

「全く！こんな所で何してるの！あれだけ男屋に入るなっていったのに！！」

と言って、部屋に入ってきたINは、ボイラーの前で脚立に登っているHHとその下でHHを見上げているIMの姿を見た。

「かあさん、この人ボイラーの事が解るみたい…」

とIMがHHを指さして言うのと、

「そーなの？」

とI Nが不審そうに言った。

「…だから、直せるかもって…」

I Mは母親を見てそう言うのと、再びボイラーを見ているH Hを見上げた。

「…分かったわ…でも、早く支度しないと学校に遅れるわよ」

と、I NはI Mを急かす様に言った。

「…はい…」

とI Mは残念そうに言うのと、H Hに対して

「あたしが帰るまで、ウチに居て」

と言った。H Hが黙って頷くと、あきれ顔のI Nの脇を抜けて部屋の外に出て行った。

I Nは、H Hが登っている脚立の側に来て、

「あんた、娘が言ってた事ホントなの？」

「はい…おいらは昨日まで海軍の駆逐艦内で釜焚きしてて、こいつと同型のボイラーを扱ってました」

「そうかい！じゃ頼まれてくれるかい！！」

「はい、一宿一飯の恩で…」

「あの子…引きが強いね…。あたしはI Nって言ってあの子…娘のMの母親だ。この店の店主だよ！」

「はい、おいらはH Hと言います」

「お願いね」

「はい」

H Hはその後ボイラーの隅々を点検した。

I Nがお茶と握り飯を持って来たタイミングで、H HはI Nに故障個所の説明をした。

「そんな細かいことは、あたしには分かんないよ…結局、お湯は出るの？どうなの？」

「ボイラー自体は問題が無いのですが、ボイラーが沸かした熱湯を一定に保つ部品とそれをあれら（と行って、HHはボイラーから各部屋に繋がってるパイプを指して）、に送り出すポンプが壊れてますね…これを交換しないと」

「そうなの？交換しないと駄目なの？」

「はい。ポンプも熱湯を一定に保つ部品は船舶関係の工場じゃないと手に入らないでしょうね」

「ふーん。やつぱりあたしにはチンブンカンブン…でも、その部品とやらを交換すれば直るの？」

「多分…」

「分かった。工務店と電気屋の息子達を今呼ぶから、あんたその子達に話してくれない？」

「はい…？」

HHは目が点になった。

INが、HHが使った食器を持って部屋を出て行こうとしたので、HHが

「そういえば…教えて欲しいことがあります」

「なんだい？」

「このボイラーって、海軍の駆逐艦のボイラーですよね？」

「そうだよ」

「いったい、どこから手に入れたのですか？」

「これはね、あたしの実家の店でボイラーを買った時についてに買ってもらったんだ」

「…そうですか」

「じゃ、息子達呼んでくるから、待ってて」

INに呼ばれて来たINの息子と呼ばれる工務店と電気屋の人にHHは故障箇所と交換する部品について話をしたが、二人には交換する部品の入手先についてのあてがない事が判明した。

●双子のボイラー

HHはINに対して、INの息子と呼ばれる工務店と電気屋の人と話した事を話し、先程INが同じボイラーを導入しているINの実家を紹介してもらおう事にした。

HHが白山亭店舗横の路地から通りに出る木戸を開けると、学校帰りのIMと出くわした。

IMはHHを見て

「あたしが帰るまで待っててって言ったのに、どこ行くの？」
と膨れた。

「ボイラーの壊れた所が分かったんでね、その部品を手に入れるために、君のお母さんの実家に行って教えて貰おうと思ってね」

「そうなの？逃げる訳じゃないのね？」

「疑われてるな…大丈夫、直すまで出て行かないよ」

「かあさんの実家なら、あたし知ってる。あたしも行く」

「…いや、君学校から帰ったばかりだろ？」

「ヤダ、あたしが行った方が、向こうも安心する」

と言って、IMはHHの袖を引っ張る。このままではIMが放してくれなさそうなので、
「分かりました。道案内をお願いします」

とHHが言うと、IMはニッコリと笑った。

HHはIMに手を引かれてINの実家であるA味噌醤油店に来た。

「おじさん、こんにちは」

「Mちゃん、いらつしやい。今日はお使いかい？」

「ちがうの、家のボイラーが壊れたの」

「えっ？ボイラーが？FKさんはどうしたの？」

「ボイラーから噴き出した熱湯を全身に浴びて死んじゃったの」

「なんだって？…それはご愁傷様…この寒い季節、ボイラー無しじゃ大変だろうに…で、Mちゃんが捕まえている人は？」

「この人、ボイラーが解るって言うんで連れてきた」

「君は？」

「はい、初めましてHHと言います。一昨日海軍を除隊して昨晚白山亭に泊めていただいたお礼にボイラーを見ていました…で、直すには部品の交換が必要なので、入手方法を聞きに来ました」

「そうかね…」

「おじさん、お願い」

「わかったよ…こちらにおいて」

と言って、店主はHH達を店裏の倉に隣接しているボイラー室に連れて行った。

「SGさん居るかい？」

「はい、これは旦那様」

「なんでも、白山亭のボイラーが壊れて、この人が修理するらしいんだが、話を聞いて貰えないか？」

「はいはい…あつ、Mお嬢さんも…これは、これは」

…A味噌醤油店は、味噌や醤油の小売りもしていますが、製造もしているので、発酵や容器

の洗浄などに等にボイラーを使用しています。一方、白山亭は店の厨房と各建屋の暖房と女給：特に娼婦の清潔の為の洗濯や大浴場にお湯を供給するのが主な目的です。作者注

S Gと言う老人は好々爺と言う風体の人で、H HとI Mに木の椅子を勧めると、

「なに用で？」

「白山亭のボイラーが壊れまして：いくつかの部品を交換する必要があります。しかし、その部品はどうやら、特注品らしくて、その辺の店では手に入りません。それで、このボイラーが同型である事を白山亭の女将さんから伺いまして、どうやったら部品が手に入るか教えて貰おうと思ひまして、伺ひました」

「そうかね：で、どの部品だい？」

「ボイラーが沸かした熱湯を一定に保つ部品とそれを送り出すポンプが壊れてます。これは何処でしたら手に入りますか？」

「：それらの部品は、港の造船所に行けば手に入るよ。そんな事白山亭のF Kならすぐ手配するだろうに」

「それが：F Kさん死んじゃったの！」

「なに？どうして？」

とS Gは驚いてI Mに訊ねた。

「ボイラーから噴き出した熱湯を全身に浴びて火傷で死んじゃったの」

「：そうか：あいつが：それは残念な事を：それで、葬儀とかは？」

「まだ、病院で調べているの！『検死』とか言っていたと思ったけど、それが終わらないとF Kさんの死体を返してもらえないんだって」

「：：：そうか」

と言って、S Gは瞑目した。

I Mは、S Gの肩を揺すって、

「で、早く店のボイラーを動かさないと皆凍えちゃうの！」

「わかりました。儂が今から港の造船所に電話しましょう…」

と言って、S Gは腰を上げるとやや曲がった腰を叩きながら、店に向かった。H H達はその後ろについて行った。店内に入ると、店主はS G達を見て、

「S Gさん、話はわかったかい？」

「はい、旦那様。壊れた部品を手配するために造船所に電話するので店の電話をかしてください」

「はい、どうぞ」

S Gは造船所に電話した。幸いH Hが必要している部品はすべて揃っているとの返事を貰い、H HとI Mは安堵した。

H HはS Gから造船所の場所を教えて貰って、I Mと白山亭に帰った。

●ボイラーが直った

白山亭母屋…

「お帰り、あらMも…」

「かあさん、本家（A味噌醤油店）行ってきた」

「えっ、Mも行ったの？」

「うん、この人が本家のボイラーを動かしている人と話して、交換する部品を確保したわ」

「そーかい、じゃ直るんだね！」

「はい、でも大きくて重いので、担いでくる訳にはいかないのと、お金がそれなりに入用になります」

「うん…分かった。あたしも行くよ」

I Nは工務店の息子にトラックと人手を借りると、港の造船所に向かった。

造船所では、S Gから話を聞いていたので、交換する部品を用意して待っていてくれた。

I Nは部品の代金を払うと、トラックに部品を載せて、白山亭に戻ってきた。

重い部品を数人がかりでボイラー室に運び入れたが、今度は部品の取り付け位置に重い部品を持ち上げて交換する方法について困ってしまった。

「H Hさん、あれ…」

と言って、I Mが指差す所を見ると、チェーンブロックがあった。

「…これで、部品交換ができるよ」

と安堵して言ったH HにI Mが微笑んだ。

H Hは早速、壊れた部品を取り外して、チェーンブロックを使用して地面に降ろし、次に交換する部品を、チェーンブロックを使用して持ち上げ、注意深く位置を調整しながら、部品をボイラーに取り付けた。

続いて、配管を接続し直し、シーリングを施して、入念なチェックを行った。

「よし、これで使える様になったはず…」

H Hは寒い季節にも関わらずすっかり汗だくになっていた。

「注水開始…水量よし！水圧よし、水漏れ…はない。燃料注入…燃料は…大丈夫…では火を入れるか」

と言って、H Hはボイラーのバルブとスイッチを操作して、ボイラーに火を入れた。暫くして火が安定し蒸気が出だした。

「蒸気圧力は…上昇中…では、配管のバルブを…」

HHは白山亭店舗、母屋に続く蒸気配管のバルブを開ける。HHの作業を手を胸の前で組んで祈る様に見ているIM：HHは配管のバルブを操作しながら、

「IMさん」

「はい？」

「お店行つて、セントラルヒーティングのバルブを開けてくれないか？多分蒸気が行つてるから、暖かくなっているはずだよ」

「うん」

と言つてIMは、ボイラー室から出て行つた。

白山亭店内：

IMは店に入り、セントラルヒーティングのバルブを掴むと

「熱っ！」

と言つて、手を離れた。

「Mちゃんどうしたの？」

店の女給の一人が訊ねた。

「ボイラーが直つたので、試しに店のセントラルヒーティングのバルブを開けてみてくれと、あの人が…」

と必死の表情でIMが言うと、女給は首を捻つたが、直ぐに

「あの人？…ああ、おかみさんが言っていた新しいボイラーマンの事？…と言う事は、ボイラーは直つたのね！！このまま春までボイラーが使えないと思つたら、ある意味背筋が凍るわ…」

と言つて、女給はカウンターから鍋掴みを手に嵌めてセントラルヒーティングのバルブを開ける。

シューツという音共に周囲が暖かくなる。

「わー、暖かい…」

と言って、女給は

「みんなー、ボイラー直ったよ！」

と店内に呼びかけると、他の女給達が

「「ホント——？」」

と言って、近くにあったセントラルヒーティングのバルブを雑巾やエプロンで火傷しない様にして開けた。

「みんな、何騒いでんだい？」

とINがはしゃいでいる女給達に訊ねると、

「おかみさん、ボイラー直りました」

「えっ、ホント？」

「はい、だから店のセントラルヒーティングのバルブを開けて温まっています」

「そうかい！だれか母屋に行って、セントラルヒーティングのバルブを開けて」

「はい」

男屋ボイラー室…

「セントラルヒーティングが使える様になったんで、みんな喜んでるわ！」

駆け込んできたIMから、店も母屋も暖房が効き始めたのを、HHは聞いた。

「…後は、お湯だな…」

HHは水をボイラーの熱で水を温める装置のバルブを開けた。

「IMさん」

「はい」

「今度は厨房に行って、お湯が出るか見てくれないか…火傷しないようにね」

「はい」

白山亭厨房…

I Mは再び店に行き、厨房に入った。

「お嬢さんどうしました？」

と厨房の料理長が驚いて訊ねた。

「お湯が使えるようになったって！」

「そうですか…では」

と言ってシェフはお湯の蛇口を捻ると、湯気が上がり、お湯が出てきた。

「よかった！」

とI Mが安堵の声を漏らすと、

「でも、お嬢さん、暫くはお湯を飲んだり、食べ物を洗ったりしないでください」

「なんで？」

「暫くお湯の流れが無かったので、お湯のパイプの中に雑菌が繁殖しています。今使うと大変な事になりますよ」

「わかったわ」

と言って、I Mは厨房を飛び出していった

男屋ボイラー室…

I Mはボイラー室に戻ると、H Hにお湯が出た事を話、ついでにシェフの話していたことを話した。

「これで、ボイラーが直ったのね！」

と興奮気味に言うIMに対して、HHは

「そうですね…でも、お湯については、ちゃんと保健所に検査してもらわないと」と言った。

●その後のHHとIM

HHは亡くなったFKの代わりにボイラーマンとして男屋に住み込みで雇われことになった。

その間、HHはC国に渡る事を再度考え始め、自分が居なくなっても、誰かが後を継いでボイラーを動かし続ける事が出来る様に、取扱いの説明や、メンテナンスのしかた、交換部品の種類と入手先について大学ノートにまとめ始めた。それを知ったIMが度々HHにちよつかいを出して、HHのしている事を妨害し続けた。それは多分、HHがノートをまとめ終わったら、白山亭から出て行ってしまうのではないかと心配したらしい…

HHはノートをまとめている過程で、その時々A味噌醤油店を訪れ、SGに見て貰い、意見を伺っていた。その時、HHは白山亭とA味噌醤油店のボイラーの出自について、SGから話を聞くことができた。

そのボイラーは、当時建造中の駆逐艦用に製造されたが、先に就航した同型の駆逐艦に重大な欠陥が見つかったために、新しく建造される駆逐艦は建造を取りやめ、解体される事になり、行き場を失ったとの事。

A味噌醤油店は、Y海軍基地に味噌と醤油を卸していて、また当時の店主の弟がY海軍基地の軍学校の機関科の学部長という縁から、行き場を失ったボイラー2機を設置料込みで安く譲り受け、一機をA味噌醤油店、もう一基を娘のINが始めようとしているミルクホール白山亭に設置する事にしたそうだ。その機関科の学部長にHHは可愛がって貰っていたので、奇妙な縁を感じ、白山亭に居座る覚悟を決めた。

やがてS Gは隠居する事になり、S Gの子のS Wが後を継いでA味噌醤油店のボイラーを扱うに当たり、H Hが作成したノートが役に立った。S WはH Hからノートを借りてそれを写して、自分のモノにした。

I Mが高校を卒業し、法律上結婚が可能になったのを機に、I MはH Hを港が一望できる高台に連れて行き、結婚を申し込んだ。

本来は逆の話である：H HがI M以上に奥手であるのと、I Mが一度決めたら絶対引かない性格が相俟った結果である。(多分、孫のH GにH Hの奥手が遺伝したのかも：(笑)作者)

：この時、H H 26歳、H M 18歳。

I Nはその後白山亭の経営を続け、末娘のH Mが子供を出産し成長して、手がかからなくなった時点で隠居する事にしてH MがI Nの跡を継いで白山亭を切り盛りしていた。

ミルクホールの店名は“白山亭”と言う名称であるが、地元では“碓屋”と言う屋号で通っていた。“碓屋”とは、船乗りを主に相手にしている娼館の屋号のことで、“白山亭”の一部の女給達の裏の仕事である。

しかし、“碓屋”は、女性の地位・権利向上を目的とした法律に基づく赤線取り締まりにより、I Nが隠居と同時に廃業。“白山亭”は、女給喫茶店として祖母の代まで続いたが、老齢と当時のY国際港が改良工事により、遠くに移転したことでY国際港駅の商店街の衰えと共に廃れて廃業した。

白山亭が廃業したので、ボイラーを動かす必要が無くなったため、H Hはボイラーの火を自ら落とし、次に誰かが利用する時に備えて、ボイラーや配管から水を抜いたり、油を挿したりと、再び誰かが火を入れることを考え、フルにメンテナンスをした。

その結果、H Hの死後、後に孫のH Gが白山亭を継いで、H Gの親友のS Kが問題なくボイラーを復活させることが出来たのも、H Hの貢献による。

●エピローグ、朝のテレビ番組、みんなの皇国ニュースの番組特集

白山亭 居間…

「あつ、始まった…HY姉さん、中継始まったよー」

テレビの前で、TYがキッチンに居るHYに声をかける。

「はーい、今行く！」

キッチンからエプロンを着けたまま、タオルで手を拭きながら、HYが駆け込んできた。

「親父、どうだった？」

と、HYがさっきまで店内に居たTYに訊ねると

「親父、緊張してたわー、大丈夫かしら？」

「昨日の打ち合わせ通り話せるといいのけど…」

と心配するHYに、

「それも、あるけど…店にI YとI Aだけで良かったの？HY姉さんも居たらよかったのに」

「わたしは…いいわ。若い娘達に任せましょ！」

「HY姉さん、歳を黙っていれば、あの中に居ても違和感ないですよ。わたしはI Aが心配で…」

と、TYが心配そうに言うと、HYは平然と

「大丈夫よ！あの娘、今では立派に女給しているし…そりや、初めの頃は注文間違えるは、カップや皿を良く割ったけど…わたしは、I Yの方が心配だわ」

「…そうかも、あの娘、やらかさなきやいいですけど」

白山亭 店内：

『本日の我が町レポートは、B県領地Y国際港駅からUTさんがお送りします。UTさん』

「はい、今日の我が町レポートはB県領地に古くからあるY国際港に隣接していますY国際港駅よりお送りします。ここY国際港駅は、開業120周年と言う事で、駅長のJさんに着ていただいています。J駅長、よろしくお願いいたします」

「はい、よろしく願います」

「ここ、Y国際港駅は開業120周年と言う事です…」

「はい、当駅は、時の皇王陛下の御命により、帝都の海の玄関として外国に早くから港を開いたY国際港と隣のY海軍基地への輸送・交通の便を強化する為と、時の皇王陛下の富国強兵の宣下により、全国の鉄道網の開通事業の先駆けとして、K府領地との間に最初に開通した鉄道の駅の一つとして開業いたしました。現在の駅舎は4代目ですが、初代の駅舎はそのまま残し、Y国際港駅開業資料館として開放しています」

「ご説明、ありがとうございます。では、そのY国際港駅開業資料館に行ってみましょう…赤いレンガ造りでもシックな建物ですね」

「はい、この建物を設計したのは、帝都の玄関である帝都駅を設計した、建築家YY氏が設計しました」

「そうですね、かの有名な」

「はい、時の皇王陛下が外国に開いた港であるので、ここも帝都駅と同様玄関としての威厳を示す様、下知されたそうです」

「そうですね。ここでもう一方、Y市観光協会のDさんにもお話を伺います。Dさん、朝早くからスマセン」

「はい、よろしく願います」

「Y国際港も今年開港150周年と言う事で、お目出たいことが続きますね」

「はい、Y国際港は、時の皇王陛下の御命により、隣接するY海軍基地と共に150年前に開港しました。現在は帝都に帝都国際港がありますが、Y国際港は旅客・運輸・国内フェリーの港としての役割が大きく、今でも外国船航路の2大玄関口として、機能しています。また、ここには離島空路の飛行艇の発着場があります」

「ありがとうございます。昔のY国際港は別の位置にあったと聞いていますが」

「はい、現在のY国際港は、ここからバスで行く距離にありますが、開港当時のY国際港は、この駅から徒歩で行ける距離にありました」

と言って、Y市観光協会のDはY国際港駅開業資料館の開業当時の地図を示す。

「…こんなに近くにあったんですね」

「はい、現在のY国際港の位置は、隣のパネルに比較として展示しています」

「…結構、遠くなりましたね？どうしてですか？」

「はい、開港当時、外国船の船も小さく、吃水が浅いので水深が深くなくても、港の栈橋まで入ってこれたのですが、年々船の巨大化が進み、栈橋に船が付けられなくなって沖に停泊した大型船との間を舳を使って人や荷を降ろすようになってしまいました。時の皇王陛下が、当時旅客機が無い時代に外国訪問をするに当たり、この港を使用していたので、御不便にお感じになり、国家事業して、帝都国際港と共に当港を整備する事になりました。港の拡張ならびに港の水深を深くする工事をした結果、現在の栈橋のある位置にまで港が移動し、このY国際港駅からバスに乗り継いで行くまでになりました…そのため、一時は駅前の商店街は寂れてしまったそうです」

「…そうですか…そんな事があったのですね。ご説明ありがとうございます」

と言って、レポーターのUTは駅長のJとY市観光協会のDと別れて、Y国際港駅開業資料館の外に出る。

「先程、Y国際港駅開業資料館でY市観光協会の方のご説明がありました通り、一時は衰退した駅前商店街ですが、今ではまた活気を取り戻しました。それに貢献したお店がありますので、ご紹介します」

と言って、レポーターのUTは駅前のロータリーを回り、隣接する国道を渡る。

「ここです。白山亭と言ってシックな建物が特徴の喫茶店です。今では“女給喫茶”としても有名な場所です。普段ならまだ開店前ですが、今日は特別に開けていただきました。こんにちは—」

「いらっしゃいませ」

白山亭の女給服姿のIYとIAとホールスタッフ姿のHGが出迎える。

「ここ白山亭のオーナーであるHGさんと、ここで働いている女給さん達が元気に出迎えていただきました」

「オーナーのHGさんにお話を伺っていきます。この白山亭は創業100年と言う事ですが」

HGは店内レジの後ろのパネルを指しながら、

「はい、私の曾祖母がY国際港駅開業後の駅前開発時にここに開業しました。曾祖母の後を娘の祖母が継ぎ、約70年間営業していましたが、街の衰退と祖母の高齢により、やむを得ず店を閉めました…その間約25年…私が祖母の跡を継いで5年前にこの店を再開させ、現在に至ります」

「ご説明ありがとうございます。そんな時代があったんですね」

「はい」

「この店の名物を紹介してください」

「はい、この店の名物は白山亭オリジナルコーヒーと白山亭サンドウィッチです」

と言って、店内のテーブルに置いてある白山亭オリジナルコーヒーと白山亭サンドウィッ

チを示す。

「…“サンドイッチ”ではなくて、“サンドウィッチ”なのですね」

レポーターのUTはサンドウィッチを見てからHGに向き直り、尋ねる。

「はい、昔は“サンドウィッチ”と発音していました。隣接するY海軍基地の兵隊が外国で食べていたサンドウィッチのレシピを持ち帰り、曾祖母に同じようなサンドウィッチを所望したところから始まったと聞いています。その後、祖母がレシピを変えて今のサンドウィッチになっています。またコーヒ―は創業当時コーヒ―の輸入国が限られていましたので、曾祖母があれこれコーヒ―豆のブレンドの配合を試し、豆の配合にこだわってコクのあるうま味を追及したそうです」

レポーターのUTはテーブルに着き、白山亭サンドウィッチを示して、

「まず、白山亭サンドウィッチですが、卵サンド、ポテトサラダサンド、野菜サンド、ハムカツサンドの4種です。このハムカツサンドと言うのは独特ですね？HGオーナー」

と言って、HGに振り返ると、

「はい、曾祖母のレシピでは、ポテトサラダサンド、野菜サンド、ハムチーズサンド、苺ジャムサンドとなっていました。それを祖母がもっと栄養が取れるようにと、当時安価で手に入れやすかった卵を使った卵サンドを加え、ハムチーズサンドをハムカツサンドに変更し、苺ジャムサンドを辞めたと祖母のレシピ本に書いてありました」

「なぜ、苺ジャムサンドを廃止したのですか？それから、ハムチーズサンドをハムカツサンドにしたのでしょうか？」

「はい、それは当時の食糧事情にあったそうです。祖母の時代は先の大戦により、南方のZ県領地特産の砂糖の生産が度重なるC国の侵攻で少なくなり、値段が高価になった結果、砂糖を大量に使用したジャム類の生産が減り、手に入りづらかったそうです。またハムチーズサンドをハムカツサンドにしたのは、同様の理由で乳製品が高騰したのと、やはり肉類が高

価になったため、見た目にハムを厚く見せる理由から、本来手間のかかる揚げ物にしたそうです。あつ、今の当店は厚くしていますよ、ハハハ」

と言つてHGは苦笑いをした。

「…そうでしたか、先の大戦による苦しい事情があったのですね」

「はい、私は子供の頃に祖母が曾祖母のレシピを再現したサンドウィッチを作ってくれ、食べた事がありました。その時の祖母の話では、『昔の苺ジャムはもつと酸っぱくて、あたしは嫌いだつた』と言っていました。今、祖母の言っていた苺ジャムを当店で再現できないかと試行錯誤しています」

「そうすると、これから、ひいおば様のレシピを再現しようしているんですね」

「はい、近所の古老の意見とか、Y海軍基地から当時のジャムに関する資料を提供していたので、かなり近づけたモノを近々メニューに追加する予定です。ただ、近年の苺とかは甘くなったので、酸っぱい苺ジャムが入手しづらいので、木苺を使う事も考えています」

「ありがとうございます。親子3代（正確には4代ですが、HGの父の代には白山亭が営業していないので、こうなります。作者注）に受け継がれたメニュー、早速私もいただきさせていただきます」

と言つて、UTがサンドウィッチに手をとる所で、

「あつ、コーヒーが冷めてしまったのでお取替えます」

と言つて、IAが新たにコーヒー持つて来てコーヒーカップを入れ替える。UTはそれを見て微笑み。

「今、この店のウェイトレスさん…ここでは『女給さん』と呼ばれていますが、可愛い制服ですね」

「ありがとうございます。では冷めない内にどうぞ」

「いただきます」

UTはサンドウィッチを口に入れると

「美味しいです。ではこちらのコーヒーも…」

と言ってコーヒーを一口。

「うーん、こちらもコクがあって美味しい」

と言って、ニツコリ笑う。

「あつ、HGオーナー。ここのお店の制服についてですが、まず、なぜこの店では“ウェイトレス”と呼ばずに“女給さん”と呼ぶのでしょうか？」

「はい、曾祖母が創業した時に、この店は“ミルクホール白山亭”と言いまして、当時の政府が皇国の人々の体質改善を目的として牛乳を飲むことを推奨し、それを提供する店として、昼は軽食と喫茶、夜は酒場（HGは娼館の事をわざと言わなかった。作者注）と言う、営業形態で、それらを給仕する女性と言う事からです。当時皇国各地にあった他のミルクホールも“女給”と言う言葉を使っていました。その名残です」

「先程、私に給仕していただいた彼女…ちよつとこちらに来てくれますか？」

「はい」と言って、IAがカメラに入る。

「この女給さんの姿、可愛いですね…どこかで見た事ありませんか？スタジオの皆さん」

『えーっと、以前人気歌手のIMさんが番組で見せた“私のお気に入りの1枚”の写真の姿に似ていますね』

「はい、そうですね。実はこの白山亭はですね。人気歌手IMさんをはじめ、アクション女優CEさん、D国の人気アーティストSBさんも来店されています。特にIMさんはこの店がお気に入りとの事で、よくコーヒーを飲みを訪れるそうで、この様に同じ事務所のCEさんとこの女給服を着用した写真をお借りしました」

と言って、UTは女給姿のIMとCEの写真を見せる。

『まあ…可愛い！』

「この写真は、昨年高視聴率だった、スペシャル連続ドラマ『女性歌手の乗船したフェリー乗っ取り事件、テロリストに乗っ取られたフェリー…果たして親友の白バイ警官は彼女を助け出せるのか!?（同じチャンネルです(笑)作者注)』のクランクアップ後に番組宣伝でこの店内で撮影されたものです」

『そうだったんですね』

「この白山亭には、実はもう一つ歴史を感じさせるものがあります。ではH Gオーナーご案内をお願いします」

H GはU Tとカメラマンを伴い、バーカウンター横の従業員出入り口から中庭にでて、男屋に入る。男屋の奥のボイラー室に入ると、

「ご覧ください！この大きな機械：H Gオーナーこれは一体？」

「これは、当店創業時に私の曾祖母が導入したボイラーです。当時、Y海軍基地の工廠から買い入れ、裏の運河を使ってここに設置したと伝え聞いています」

「どーです！このボイラーは100年前の物だそうです！このボイラーは何につかっているのですか？」

「主に店の厨房へのお湯の供給と、冬は店と私達が住んでいる住居への暖房に使用します。今は床暖房に改装してそちらに使用していますが、昔はセントラルヒーティングに使っていました。（H Gは敢えて風呂の話はしません。作者注）」

「はい、ありがとうございます。では、お店に戻ります」

H GとU Tはまた店内に戻った。

「この店では、この女給姿と白山亭コーヒーと白山亭サンドウィッチを求めて全国から人が押しかけて来るそうです。それがこの街の活気を取り戻した理由の一つですが、実はもう

一つあります。今からそこにご案内します…H Gオーナー、朝早くからお邪魔しまして、ありがとうございます」

「いえいえ…」

U Tは白山亭を後にすると、Y国際港商店街を小走りに港に向かって行つた。

「この商店街では、この様に古くからある個人商店が立ち並んでいます。歩道の上に買い物客が雨に濡れないようにと、雨よけの屋根が設置してあります。あつ、テレビの中継を見てくれた商店街の人々か店先から手を降っています。ありがとうございます」

U Tは商店街の外れに來ると、

「…商店街が長くて、走るのが大変でしたが、ご覧ください」

と言って、U Tは町はずれにある赤レンガ造りの建物を指す。

「ここはですね、一昨年オープンしたY港街ショッピングモールと言って、Y国際港開港當時にたてられたレンガ造りの倉庫を利用したショッピングモールになっています。ここから向こうに産業道路が見えると思いますが、あの産業道路の先に開港同時棧橋があつたそうです。今は記念碑と資料館があるそうです。ではここからはY港街ショッピングモール社長、Dさんにお話をお伺いします」

「はい、よろしくお願いいたします」

「社長、このショッピングモールをオープンするきっかけについて教えてください」

「はい、このショッピングモールは、Y国際港に荷揚げされる世界各地の物産を広く提供する目的と、皇国を初め、世界各地の美味しいモノを揃えることを目的にオープンしました」

「その際にご苦労されたことはありますか？」

「そうですね。このY国際港駅前の賑わいが以前の様に戻る事とこの商店街と如何に共存するかに細心の注意を払いました。結果、昔の倉庫跡を使用して、お洒落なショッピング

モールにしました」

「ありがとうございます。中を拝見しますと、小さな店舗が多くありますね。輸入食材の店とかスイーツの店とか、外国の衣装の店もありますね…」

リポーターUTのレポートはまだ続いていたが、白山亭では

「准尉、お疲れさまでした！」

IYがHGにおしほりを渡す。HGは受け取ったお絞りで顔を拭くと、フーっとため息をついて、

「俺…なんか変な事言わなかった？」

とIYとIAに聞いた。

「いいえ…全然…昨日打ち合わせた通りにしゃべりましたよ」

とIYが言うと、

「准尉のお話で、ここの店の事について勉強になりました」

とIAも言う。

「ありがとう…緊張した…」

「隊員達（民兵会社DKの社員達のこと）を前に堂々と講義が出来る人が緊張するとは驚きです」

とIAが驚きの表情で言うと、

「…あれはなあ…目の前の人の表情や反応を見てやるからね。テレビカメラの越しではそれがわからんだけに緊張するよ」

「そうだったんですね」

と言ってIAが笑うと、IYも目を細めた。

「准尉、見てましたよー、キチンと話してましたよ」

と、バーカウンター横の従業員出入り口から、H YとT Yが入って来た。

「T Tが出勤してきたら、何か言われそうだな」

「そうですね。『なんで、私を呼んでくれなかったのですか？』って言われそうですね」

とH Yが言うと、

「だよな…でも、番組スタッフが来たのは昨日の晩だし…T Tが帰宅した後だし…この取材は最初予定に入ってなくて、それをY市観光協会がここをねじ込んできて、番組スタッフと話をしていたら、ここの歴史と女給とコーヒーとサンドウィッチとI Mさんの事と、ボイラーの話が番組スタッフの好奇心を煽ったらしく…」

「准尉、言い訳がましいですよ」

とH Yが笑って言った。

「わたしは、I Yがよく画面に入らなかったのか不思議に思ったけど」

とT YがI Yを見て言うと、I Yが

「あの雑誌の一件（「巻き込まれ親父の子守唄」参照）以来、目立つのを控えるようにしました」

「へえー、チョットは進歩したわね。わたしは、I Mさんの話が出た時に、カメラマンがI Yの事を映して、リポーターがI Yの事を話して、I Yが変な発言をしないかヒヤヒヤして見てたけど」

とH Yが言うと、

「…やめてください！H Y先輩」

とムキになって、I Yが言うと、H Gが

「…嗚呼、それについては、昨日の番組スタッフとの打ち合わせで、敢えて触れない様に頼んだんだ…M K社長とB 侯爵様の手前」

「「成程…」」

…その後、出勤して来たＴＴに「あらぁ…テレビの取材があつたなんて…私には一言も断りもなく…なんで私を呼んでいただけなかつたのでしょうか？准尉殿？」と、目が笑っていない笑顔で詰め寄られ、ＨＧはたじたじとなった。

巻き込まれ親父の番外編「白山亭恋物語」 Ⅱ完Ⅱ